

岩手医科大学歯学会第 81 回例会抄録

日時：平成 28 年 7 月 14 日（木）午後 5 時 30 分より

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室（C 棟 6 階）

特別講演

口腔医学と消化器病学の接点

○千葉 俊美

口腔医学講座関連医学分野

消化器の役割は、消化吸収作用、免疫反応、消化管運動機能（蠕動運動）など多岐にわたっており、最近では腸内細菌と全身疾患の関係などの研究が進められている。消化器疾患と口腔疾患との関わりは強く、口腔粘膜所見から癌発生母地でもある消化管ポリポーシスの診断の契機となることがある。また、ヘリコバクターピロリ菌や潰瘍性大腸炎などによる慢性炎症から発生する胃癌や大腸癌発癌の関与は、慢性口腔疾患の癌発生過程と機序が類似している。さらに、脳と腸はペプチドを通して互いに密接に影響を及ぼしている脳腸相関と呼ばれる概念が確立し、最近ではペプチドと唾液分泌などの関与も報告されている。一方で、抗炎症作用を有する NSAIDs はアラキドン酸カスケードから産生されるプロスタグランジンと消化性潰瘍との関係から Cyclooxygenase-2 (Cox-2) の役割が重要視されている。また、器質的疾患を有しないにもかかわらず、腹部症状を呈する過敏性腸症候群におけるサイトカインなどの微小炎症や遺伝子多型の関与などで病態の解明が試みられており、このことは口腔内炎症と全身疾患との関与に微小炎症が関わっている概念と類似している。さらに、多チャンネル食道内圧測定 (high-resolution manometry: HRM) により、嚥下困難症例の嚥下機能と食道運動機能の関係を検討すると、咽頭内圧の低下傾向を認め、食道収縮波の強さの低下を認めるなど嚥下困難の病態を示唆した。今後、HRM を用いた嚥下・食道運動機能検査は嚥下困難の病態解明に寄与し創薬につながる可能性がある。以上のように、

口腔医学と消化器病学は密接に関わっており、今後さらなる研究の発展に期待したい。

一般演題

1. 南米ウルグアイにおける歯科医学の現状

○三上 俊成、武田 泰典

病理学講座病態解析学分野

2016 年 2～3 月に 2 週間の予定で、南米のウルグアイ共和国大学歯学部病理学講座 (Ronell Bologna-Molina 教授) を訪問したので、ウルグアイにおける歯科医学の現状について報告した。

南米のウルグアイは人口約 340 万人の小さな国だが、南米で最も治安の良い福祉国家である。医学部と歯学部は 2 校ずつあり、歯学部は国立ウルグアイ共和国大学歯学部と私立 Catolica 大学歯学部であった。今回訪れたウルグアイ共和国大学歯学部では入学試験がなく、入学者数が約 250 名であるのに対し卒業生数は約 80 名であった。大学のカリキュラムを履修することで歯科医師免許が得られるため、卒業後の歯科医師国家試験はない。男女比が 1:9 と女性が多いことも特色の 1 つであった。教員の多くは開業医または勤務医を兼任しており、フルタイムの教員は 2 名であった。

大学院教育は修士課程 2 年、博士課程 3 年で、学内指導教員 1 名の他に学外（主に外国）指導教員 1 名が担当していた。大学院生は歯学部卒業後の若い歯科医師ばかりでなく、むしろベテランの歯科医師が多かった。大学院では基礎系よりも臨床系の研究が盛んであったが、分子生物学に関連した基礎研究に対する需要も高まってきたとのことであった。